

「グローバル社会に生きる力」をはぐくむ

◎田代 勝（東京学芸大学附属大泉小学校）

○三大寺敏夫（同上）

岩岡 敬祐（同上）

石毛 隆史（同上）

本多 広和（平成25年度 同上）

【キーワード】異文化間教育と外国語教育のカリキュラム構築

1 はじめに

現在、世界のあらゆるところで、既にグローバル化が進み、その動きはますます活発になっている。グローバル化とは、ヒト、モノ、カネ、情報が国境を越えて広がることと、言われている。これにより、国境を越えたヒト、モノ、カネ、情報の動きが盛んになり、一方ではそれが人々の生き方や価値観の画一化を、更にもう一方では多様さを生んでいる。とりわけ日本国内の学校に目を移しても、外国人の定住化、多文化的背景を持つ子どもの増加により、異文化接触の機会が増大している。こうした現代の社会を、本研究でもグローバル社会と呼ぶこととした。

平成23年5月には、グローバル社会に対応すべく、内閣官房長官を議長に「グローバル人材育成推進会議」が開催された。同年の中間まとめを経て、翌年6月に審議まとめが発表され、その中には次のような文言がある。

「豊かな語学力・コミュニケーション能力や異文化体験」を身につけ、国際的に活躍できる「グローバル人材」を我が国で継続的に育てていかなければならない。

これより、国の政策として「グローバル人材の育成」が位置づけられていることが理解できる。

こうしたグローバル社会では、異質な他者とかかわりあいながら、課題を解決して新たな関係をつくりあげていく多文化共生の考え方が重視されるようになってきた。子どもたちが身につけておくべき力として求められる内容も時代と共に変化してきている。こうした動きは、今後一層高まることが予想されることから、学校教育の果たす役割は大きく、その内容の充実が求められていると考えられる。各界から提唱されている内容を見ると、英語を始めとした語学力の強化、国際バカロレアの認定校増加や留学の推進等、高校や大学での改革が多いことが見受けられる。しかし、小学校段階でもグローバル社会に対応した基礎的な力を身につけるべきであると考え、本研究主題「グローバル社会に生きる力」をはぐくむを設定した。

2 本プロジェクトの目的

グローバル社会に生きる力とは、どのような資質・能力なのかをさぐるとともに、その力をはぐくむための、小学校教育カリキュラムの構築をしようとするものである。

3 本プロジェクトの内容

全教科・領域での異文化間教育 小学校1年生からの「英語教育」 帰国児童・外国人児童への「日本語教育」
--

上記を研究の3本の柱とした。その視点より、『「グローバル社会に生きる力」をはぐくむ』に迫ろうと試みた。なぜ、これらなのか、その理由や本校の考える「グローバル社会に生きる力」とは何か、また研究の取り組みについては、下記の通りである。

(1) 基盤的資質と基礎学力

グローバル社会で生きる力をはぐくむためには、何を身につけたらよいのか。まず、小学校段階での基礎的な力として、情意面での基盤的資質、学習面での基礎学力が重要であると考えた。基盤的資質とは、文科省；生きる力より「自らを律しつつ他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」にあるように、「豊かな心を持つこと」であると捉えている。それが、共生するための基盤になると考えられるからである。本校では、これまで研究より、「自己肯定感」「人と関わる有用感」「思いやり」「寛容性」「たくましさ」等の、心の豊かさを目指してきた経緯がある。これらを基盤的資質と捉える。これには、日常の学習時間の他、総合的な学習の時間や学年縦割り集団での活動、行事等の特別活動においても、その基盤づくりに大きく関わっていると考えられる。基礎学力とは思考力・判断力・表現力等、通常の教科学習で培われる力のことである。

(2) 異文化間対応力と外国語力

「グローバル社会に生きる力」を育むためには、基盤的資質・基礎学力に加えて、グローバル社会に生きるための「異文化間対応力」と、「外国語力」が必要だと考えた。

異文化間対応力とは、異文化間教育で育まれる力である。これまでは他文化共生を考える際には、国際理解教育として、外国の文化を学ぶ傾向が強いものであった。一方、「異文化間教育」は、自己の文化を見つめなおし、異文化の相手とのかかわり合いを重視している。例えば、クラスの中の友達とのかかわり合いである。小学校段階では、自分の主張が強く、相手の意見を受け入れることは難しい年代である。しかし相手の意見に妥協するのではなく、相手の意見をよく聞いて理解することが、日常の学校生活でも大切にされているかかわり合いである。更に身近にはない異文化に出会った場面では、自分の経験からは想像もできず、その物事に耳を傾けることすら難しくなることが予想できる。そんな時でも、その意見や物事を排除するのではなく、自分とその相手の間に立って見つめ直したり、新しい考えを創り出したりするようなかかわり合いを異文化間教育で重視しているのである。このようなかかわり合いが、将来のグローバル社会で生かされると考えたのである。

そこで異文化間教育で育む力を、「文化と文化の間に立つことを通して、物の見方や考え方を育み、自分の生き方を広げる力」と捉え、これを本研究における「異文化間対応力」と定義する。

次に、外国語力についてであるが、グローバル社会は、文化の異なる人々との協同が求められる時代である。外国人に出会うことが増え、語学力が必要になることは必至である。英語活動として1つの外国語が小学校において必修化されたことや、「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進」も文部科学省より打ち出されている。また日本国内では、外国人児童・帰国児童の増加により、日本語学習が必要な児童が増えている。身につけた外国語によってコミュニケーションがスムーズにとることができるようになることが容易に想像できる。そのようなコミュニケーションツールとなる力を、外国語力と定義する。

このような理由から、グローバル社会に生きる力とは、本校では基盤的資質・基礎学力に加えて、「異文化間対応力」と「外国語力」が、必要であると考えている。

(3) 目指す児童像

グローバル社会に生きる力として挙げた2つの力より、次の児童像を設定した。

異文化間対応力より、「視野を広げ、異文化の間に立って、行動していこうとする子」。

外国語力より、「外国語を学んでいこうとする子」。

これらにより、異文化間教育、つまり全教科・領域で「視野を広げ、異文化の間に立って、行動してい

こうとする子」を目指し、英語教育・日本語教育で「外国語を学んでいこうとする子」を目指すこととした。

(4) 研究の取り組み

異文化間教育では、総合的な学習の時間ではなく、全教科と領域での授業を行った。教科毎に異文化間に立つ教材開発と、異文化間教育から見たカリキュラム作り、そして多岐にわたる教材の系統性の整理について取り組んできた。

英語教育では、本校においては1年生から取り組んでいる。またこれまで取り組んできた「意味のある英語をたくさん聞かせる input 重視の授業」を継続し、その中で何を Output させるのかを明確にする。更に、単元構成の系統を整理してカリキュラム作りにも取り組んだ。

日本語教育では、学習言語につなげる G C L（少人数での話し合い活動）の種類を整理し、時間数を増やした。また日本語個別シートの改訂と共に、その進め方の例を明らかにした。

4 成果と課題

(1) 成果

異文化間教育

① 全教科と道徳において、異文化間教育の題材を見直し、カリキュラム作成に取り組んだこと。

異文化間教育の授業を総合的な学習の時間で行うことは、これまでの研究で提案してきた。ただし、総合的な学習の時間で、異文化間教育ばかりを扱うことはできない。昨年度の成果より、異文化間教育を各教科（年間1本）にちりばめることによって、より多くの内容や視点から異文化間教育ができ、効果的であると思われた。本年度はその内容を各教科・道徳で見直し、ステップ3を達成できる授業を再開発した。その結果、時期が多少偏ってしまうところはあったが、各学年においてバランスを考えたカリキュラムを作成したことが成果である。

② 異文化間教育の授業において、異文化の間に立って、悩んだり、葛藤したりする場面を設定したこと。

これまでの研究から、異文化間教育では、相手の文化を知ること自分たちの行動の枠を広げること、つまり「生き方を広げること」が「グローバル社会に生きる力」をはぐくむと考えた。そのために、異文化間教育の授業では、外国の文化に触れるだけの活動ではなく、自分と異質な他者との間、時には異文化と異文化との間に立って悩んだり、葛藤したりする場面を設定して取り組んだことが成果であった。その場面を乗り越えた段階をステップ3と定義し、それによって生き方を広げられることと考える。

更に、「視野を広げる力」「対話力」「解決力・実践力」の3つの力を異文化間対応力とし、それぞれ何か1つの力に重点を置いたり、3つの力を統合したりすることが、葛藤場面において必要であると考え、取り組んだことも成果であったと思われる。

英語教育

① 英語の単語を場面に応じてたくさん input することで、単語での output がされた。

また、そのような授業作りができるようなアクティビティ集の改訂も成果といえる。

② 児童の英語への興味・関心が向上した。

1年生から行うことで、より親しんで取り組むことができたと思われる。また低学年からの音の積み上げをしっかりとした上で、中学年で少しずつ文字を提示しながら英語活動を進め、高学年で実際

に読んだり、書いたりする活動を入れて文字への慣れ親しみを高めることができた。

③ T1が児童の実態を把握し主体的に授業をおこなうという授業形態が定着してきた。

日本語教育

① GCLで扱う内容について見直し、また時間数を増やしたこと。

これまで、内容を「理由・比較・賛成反対・関連・予想・判断・整理」に分けて学習活動としてGCLに取り組んできた。本年度は、週に2時間の日本語の授業の10分程度を「フリートーク」として毎時間設定したことと、GCLの授業時間数を増やした。そこで、「理由・比較・賛成反対」は使用頻度が高く、フリートークの時間でも扱うことができることが見えてきたことが成果である。

② 日本語個別シートの再編（一部改訂）を行ったことも成果である。具体的な使用例も示した。

(2) 課題

異文化間教育

① 異文化間教育の単元構成の軸が何かを考える必要がある。

今回示した異文化間教育の単元配列表と教科毎のカリキュラムにおいて、教科横断的な視点からの構成を考える必要がある。

② 異文化間教育によって児童がどのように成長したのか、詳しく検証する必要がある。また、客観的なデータをどのようにとったらよいか、検討する必要がある。

英語教育

① 単語でinputしていくと場面に応じての単語がoutputされるのだが、フレーズや文にするまでには至らなかった。

② 活動の細案がそのまま使えるものになっていない。

③ 単元の構成を考えた上でのinput/output表の完成ができなかった。

日本語学習

① 日本語の個別学習シートの使用方法について提案をしたが、様々な児童に対応するべく、今後実践を重ね、更により使用方法を示していきたい。

② GCLの更なる教材開発とレベルアップが必要である。